

2023年フクシマ連帯キャラバンに参加して

全港湾東北地方ひたち支部青年女性部
部長 木村 貴弘

新型コロナウイルスの影響により、思うような取り組みが出来ずにいたフクシマ連帯キャラバン。今回、久しぶりに全国各地の仲間と共に開催できたことをとても嬉しく思います。

20日の茨城行動では、地元ひたち支部として、Bコースの副責任者と自治体要請時の司会進行を務めさせて頂きました。BコースはUPZ県内の内陸部にある5市町と水戸市に対し、東海第二原発で過酷事故が発生した際、真に実効性ある避難計画の策定をすること、再稼働の可否判断において、住民の意志を尊重すること、政府にトリチウム汚染水の海洋放出の見直しを求めていくことについて要請を行いました。私は、要請行動を毎年行っていますが、東海第二原発と汚染水の問題に関して各自治体からは、いままでと同じ返答でした。「海に面していないからわからない」「関係ない」このような姿勢に感じました。しかしながら、中には原発再稼働に反対という自治体もありましたし、「フクシマ連帯キャラバンの取り組みに心から敬意を表します」という自治体もありました。

けれど、東日本大震災福島第一原発事故から12年を経ても、肝心なところは変わっていないと感じました。事故が起きてからの「福島の被災地、避難者」、「茨城県民と自治体の考え方」。キャラバン隊の認知度が上がったのは嬉しいですが、他人事だとしか思っていない住民や自治体に、原発事故が招く現実の恐ろしさを伝えていかななくてはならないと、改めて感じた茨城行動でした。

2020年は新型コロナウイルスの影響により、茨城行動は出来ませんでした。翌年からは運動は止めてはならないと、小さくても何とか続けようと仲間と頑張りました。歯を食いしばり、昨年はコロナ前と同じような茨城での行動まで進みました。今年はコロナ以前の、それ以上のキャラバンにしようと、仲間と共に計画してきました。そして、一度は止まりかけたフクシマ連帯キャラバン隊として、全国各地から仲間が駆け付けてくれました。「きよなら原発全国集会」では、最後にキャラバン隊全員がキャラバンに関わった方々に報告をしました。仲間の心強さ、共に運動を全う出来た達成感から、つい涙をこぼして自分達の行動を振り返りました。全国から集まった皆さんから温かい拍手と言葉をいただき、自分達がやってきた行動は間違っていない、それを最高の仲間とやり遂げたことを実感することが出来ました。

この日本から今すぐ原発が無くなることはありません。しかし、私達の子供や孫の世代までこの問題を抱えて、生活してほしくないと思っています。人として、親として、今出来ることに全力で取り組み、責任を果たしたいと思います。

これからも平和フォーラムはじめ、各団体、そして全港湾が一丸となり団結してこの原発問題に本気で向き合わなければ、日本を変えることは出来ないと感じたキャラバンでした。